

日本語教育とコロケーション：連語の形で用法を学ぶ重要性

STRAFELLA Elga Laura (国立国語研究所 日本語学術振興会特別研究員)

前川 喜久雄 (国立国語研究所 コーパス開発センター 言語資源研究系)

Japanese-language Education and Collocations: The Importance of Learning Word Co-occurrences

Elga Laura Strafella (National Institute for Japanese Language and Linguistics, JSPS
Postdoctoral Fellow)

Kikuo Maekawa (National Institute for Japanese Language and Linguistics, Department of Corpus
Studies)

要旨

コロケーション研究は、現在では自然言語処理だけでなく、日本語学や日本語教育においても重要な研究領域となっている。そのような状況を踏まえて、本研究は日本語教育における慣用表現に着目している。コーパスから単語間の強い共起性に関する情報が自動抽出できる自然言語処理の分野は近年さらに進展し、狭義の言語学の研究にも適用できるようになり、文法と語彙の知識だけでは分からない表現上の慣用は特に研究の対象となった。「足を運ぶ」、「手を焼く」、「尻が重い」、などは全体の意味が個々の語の意味とは異なるので、日本語教育では意識して教えなければならないし、辞書でも一般連語句から区別して特別に扱う必要がある。しかし、コーパスからのコロケーション情報の自動的な抽出において、そうした区別は明らかに困難で、現実にコーパスの分析結果を手で処理するしかない。本研究では、イタリア人の日本語学習者（中級者）を対象とし、BCCWJから抽出した連語を処理するために調査を行なった結果を報告する。そして、日本語の母語話者が学校で学習する基本的な専門表現も単独で覚えるのではなく連語の形で用法を学ぶように学習者もコロケーションの意味と用法を学ぶことが重要であることを指摘する。

1. はじめに

現在、世界でコロケーション習得に関する研究が徐々に成果をあげてきている。しかし、実際の日本語教育ではその成果を生かしてないのが事実である。本稿ではヨーロッパのイタリアの実態を調べる。

2. 辞書とコロケーション

コロケーションとは *node*¹ (共起関係にある主要語) と *collocate*² (中心語と連語する語) の習慣的な結びつきであり、典型的には名詞・動詞・形容詞および副詞からなる句である。慣用句 (いわゆる「イディオム」) と比べ比較的最近、辞書記述に導入されるようになった。さらに、1995年から、コーパスに基づき編集された辞書が相次いで出版され、³コーパ

¹ 「中心語」.

² 「共起語」.

³ 一例に、The BBI Dictionary of English Word Combinations. John Benjamins. 1997.

ス言語学の影響でコロケーション分析がコーパスと統計指標 (raw frequency, t-score, log-likelihood ration, MI-score, など) によって行われるようになった。それにも関わらず現在でも統計的に採集されるデータは手作業で分析しなければならない。

一般的な辞書では、語の選択制限、用例、語法などが多岐にわたるため、どうしてもコロケーションの記述は不十分になる。そこでコロケーション専門の辞典が必要とされる。筆者らは、イタリア人日本語学習者のために、コーパスデータに基づく網羅的なコロケーションリストを作成することを最終目標として、先に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から共起語を抽出した (Strafella 2013)。本稿では、抽出されたデータを評価するための1ステップとし、第2言語として日本語を学ぶイタリア人 (大学院の修士課程1・2) を対象としたコロケーション理解の調査研究を行った。

3. 調査概要

本調査は2014年の12月に行われた。実施場所は、イタリアの「ナポリ東洋大学」である。調査対象は、大学院の修士課程の学生で、「アジア・アフリカ・地中海研究科」1年生の20名と2年生の21名、「人文社会研究科、アジア・アフリカ国際関係コース」1年生7名と2年生10名 (合計58名) である。学生はコース別に授業内容が異なっているが、最終的に日本語能力試験-JLPTのN2に当たる知識を得るための教育を受ける。

調査は授業中に行われたため、四つのクラスで別々に実施した。一つの授業は2時間で行われるが、各クラスで1時間を調査のために利用させてもらった。初めに調査用紙を配布し、記入方法などの説明を行った。調査用紙には、3つの練習問題があり、次のような問題になっている。選択肢よりも翻訳の問題の方が時間を要するので、第1部と第2部の選択式問題を考えすぎないように注意を与えた。1文に対する平均的な回答時間は100秒程度であった。

第1部：文を読んでふさわしい動詞を選択してください。(11文)

第2部：文を読んでふさわしい名詞を選択してください。(11文)

第3部：次の文をイタリア語に訳してください。(10文)

問題の形式は次のようになっている：

(第1部) 1) 静かな待合室で時計の時を_____音だけが聞こえた。

- a. 図る
- b. 見る
- c. 刻む

(第2部) 1) 海外旅行で一週間ほど_____を空けます。

- a. 家
- b. 穴
- c. 間

(第3部) 1) あなたの一言で目が覚めました。

2) 物音で目が覚めた。外はまだ暗い。

第1部と第2部の質問項目は、コロケーション辞典の見出し語としてどのような品詞が適切かを定めるために考案したものである。具体的には、名詞と動詞のどちらが学習者に

とって把握しやすいかを明らかにすることが目的である。連語⁴に含まれる語彙は *A Frequency Dictionary of Japanese* (Tono et al. 2013) に掲載されているもののみである。候補(太文字で示している)は ChaKi.NET という検索ツールで抽出した。それぞれのコロケーションに関する用例は NINJAL-LWP for BCCWJ (以下、NLB) を検索したものである。より難しい語彙は、ナポリ東洋大の教師と相談した上で、振り仮名をつけ、意味を説明することにした。コロケーションが含まれる文脈すら理解できなければ、慣用的な意味も把握できないことが明らかだからである。

第3部の文章には二つ以上の意味を持つ共起語が示された。それぞれの表現は文字通りの意味で使われている用例と慣用的な意味で使われている用例を一つずつ挙げている。これによって学習者が意味を区別できるかどうかを確かめた。学生には、よく理解できない文に対してもできるだけ想像を巡らして回答するよう指示を与えた。最後に調査に関するコメントも書いてもらった。個人情報としては性別、年齢、日本語能力レベルに関する情報を集めたが、氏名は匿名とした。

4. 分析と結果

分析は、筆者らが手作業で行い、回答を図にまとめた。図1は、第1部の問題とその正答数を表したものである。

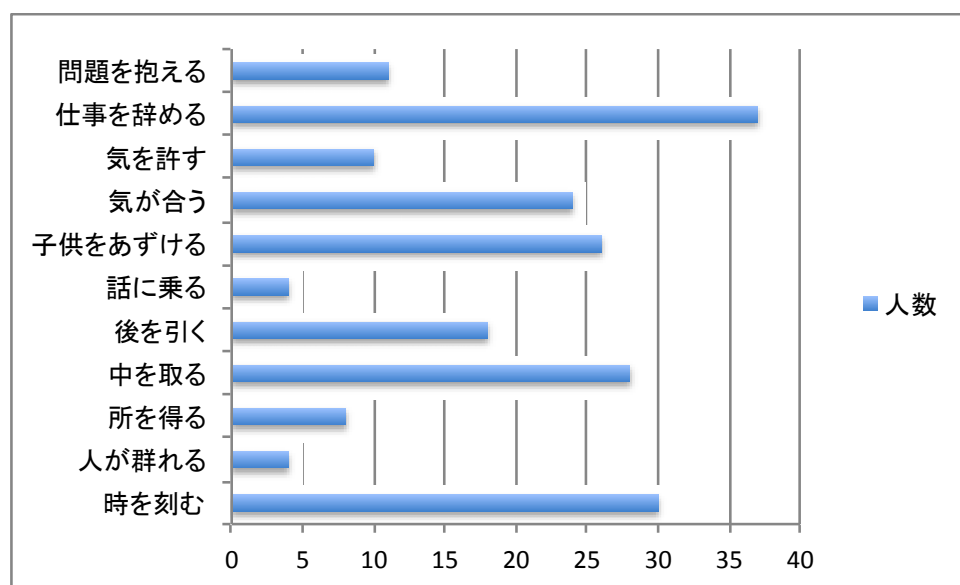


図1 動詞に関する問題とその正答数

図1から分かるように、58名中半分以上が正しく理解できたコロケーションは、「仕事を辞める」と「時を刻む」のふたつだけであった。一方、もっとも把握しにくかった表現は「話に乗る」と「人が群れる」であり、正答数は4名であった。

図2は、第2部の問題とその正答数を表したものである。

⁴ 本稿では、「連語」と「コロケーション」は同義語として使われている。

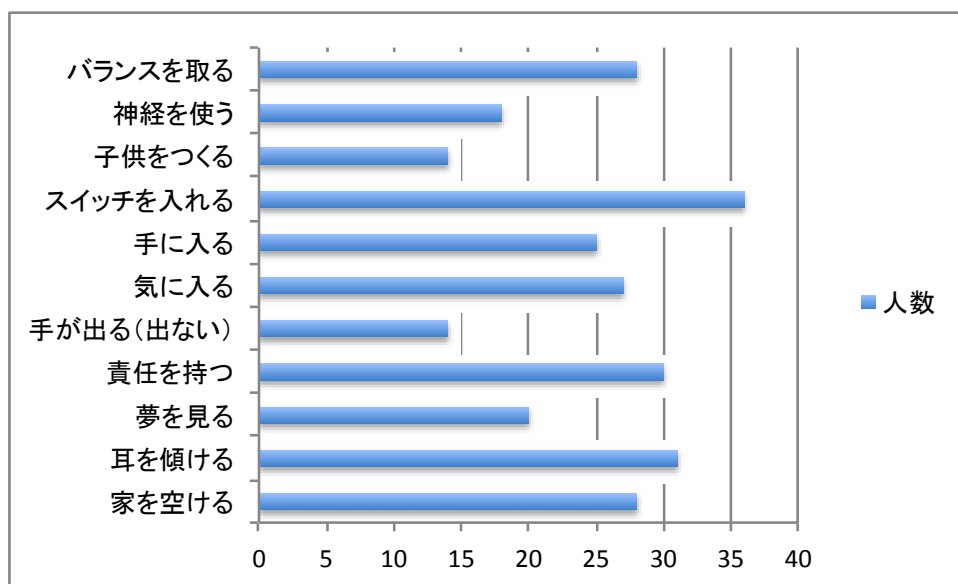


図2 名詞に関する問題とその正答数

図2から分かるように、名詞では動詞よりも正答が増える。50%以上の正答率を示した人数は少ないが、図1と比べると正答率は顕著に高い。予想に反して、「子どもをつくる」と「手が出ない」という表現の用法はあまり理解されていない。いずれも正答数は14人だけであった。

第3部の問題はペアごとに回答を分析した。以下のような傾向が観察されたが、そのうちi.とii.は広く見られたものである。

- i. 3章で示した用例のように、文字通りの意味で使われるコロケーション（「物音で目が覚めた」）の方が理解しやすかった。この場合、50%以上の学生が正答できた。
- ii. 慣用的な表現は理解しにくく、正答率は非常に低かった。例えば、「彼は**足がある**のでピンチランナーにはうってつけだ。」と「この町は夜遅くまで**足がある**ので、便利でいい。」の場合、それぞれの正答率は20%と24%である。あるいは、同じ表現の複数の意味の中で一つだけがよく知られており、もう一つの意味はほとんど知られてないケースがあることも明らかとなった。例えば、「そんな大事なことを、軽々に**口**にしてはいけない。」（正答率：52%）と「こんな高級なものを、いままで**口**にしたことはありません。」（正答率：16%）。
- iii. イタリア語にも類似した表現があると正答率が50%を上回ることがあった（例えば、「太陽が顔を出すと景色がすべて一変する。」正答率：56%）。
- iv. 意外であったのは、意味が明白だと考えられる表現においても混乱が生じることが分かった。例えば、「口を開く」の場合、「大きく口を開いてくださいと先生に言われ

ました。」という用例は 75%以上の人々が理解できず、ほとんどは次のような翻訳をした：「先生にもっと大きな声で話してくださいと言われました。」。この場合、学生は先生という言葉を見ると大学の先生のことと解釈し、それに合った状況と意味を考え出したのだと思われる。

5. まとめ

本研究では、イタリア人の日本語学習者をとおして、従来から指摘されているように、コロケーションが学習者にとって非常に困難な言語現象であることを確認した。また、学習者は動詞より名詞に関する知識が深く、名詞の選択に関する問題の方が正答率が高いことを確認した。これは事前に予期したとおりであった。子供が母語を習得しはじめるとき、動詞・形容詞・副詞ではなく、最初に名詞を使えるようになる。同様に学習者も外国語で文章を作るとき名詞からスタートするのだと考えられる。この結果は、コロケーション辞典の見出し語は名詞中心にたてるべきであることが示唆していると考えられる。

また、コロケーションは母語話者の文化と言語の歴史に関わる多面的な現象であるため、辞典を編集するときには、言語外の事実に関する資料も提供しなければならない。本調査で示されたように、イタリア人と日本人が類似した言語表現を使うにも関わらず、それぞれの言語が異なる意味を持つパターンもある。

最後に、学習者が記入したコメントでも強調されていたように、日本語での文章・会話を理解するには言葉そのものの意味が分かれば、十分であるとはかぎらない。語と語が結びついて新しい表現を生み出すともともとの語の意味と微妙なニュアンスの違いを生じ、全く違う意味になることも少なくない。学生達は調査に協力したことでコロケーションの曖昧性とその難しさを知ったように思えた。

以上を要約すると、上に述べたように日本語を学ぶ学習者は語彙を単独で覚えるのではなく、連語の形で用法を学ぶことが重要である。

6. 今後の課題

本研究は、日本語学習者を対象としているため、イタリアで日本語教育を行なっている大学の協力を得て調査を実施した。今後は、同様の調査を進め、最終的には日本語コロケーション辞典を編集したい。また、調査のフォローアップで学習者の意識を明らかにし、海外での日本語教育を支援するために母語話者（教師と生徒）の言語と状況をよく検討し、それに適する教材を開発したい。

謝 辞

本研究は、日本学術振興会外国人特別研究員（平成 25～27 年度）の補助によって実施した。本調査の実施にあたっては、ナポリ東洋大学日本語学科の協力を得た。Silvana De Maio, Junichi Oue, Chiara Ghidini の各位に特に感謝申し上げる。

文 献

Maekawa, Kikuo *et al.* (2014). Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese. *Language Resources and Evaluation*, 48, pp.345-371.

Shingo, Imai (2012). Development of a Learners' Dictionary of Polysemous Japanese Words and

- Some Proposals for Learners' Lexicography, *Acta Linguistica Asiatica*, Vol.2, No.3, pp.63-75.
- Strafella, Elga L. (2013). *Collocations in Contemporary Japanese – A Corpus-Based Language Study*. Germany: LAP LAMBERT Academic Publishing.
- Tono, Yukio, Makoto Yamazaki, and Kikuo Maekawa (2013). *A Frequency Dictionary of Japanese – core vocabulary for learners*. London & New York: ROUTLEDGE.
- 堀正広 (2011) 『これからのコロケーション研究』、ひつじ書房

関連 URL

NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) 国立国語研究所 <http://nlb.ninjal.ac.jp/>
ChaKi.NET <http://sourceforge.jp/projects/chaki/>